

日常から異変発生時の連絡ルート

一人暮らしではなく夫婦で暮らしているから、子供がいるからといって、必ずしも見守り・安否確認が不要という訳ではありません。今回は、あるケアマネジャーからお聞きしたケースをお伝えします。



83 歳の夫と 80 歳の妻の 2 人暮らしのご夫婦。夫は元官僚で、80 歳を超えても頭脳明晰さは衰えていませんでした。認知症の症状が進行してきた妻を支えるために、慣れない家事も覚え、献身的に妻の介護を担っていました。妻は要介護 1 の認定を得ていましたが、夫は妻が認知症であることを周囲に悟られたくない、ご近所にも知られたくないというお気持ちから、毎日訪問がある介護ヘルパーや送迎の車が来るデイサービスの利用を希望せず、夫婦で閉じこもった生活にならざるを得ない状況となっていました。片道 30 分ほどのところに、ひとり息子が家族とともに生活していましたが、お仕事も忙しい様子であり両親の自宅を訪問することはありませんでしたが、夫は「息子とは頻りに連絡を取っている」と話していたそうです。

夫が唯一困ったのは、食事の支度でした。そこで、ケアマネジャーが手配をして、毎日夕食用の宅配弁当を利用し、翌朝、カラの弁当容器を玄関先に出して起きてもらうようにしていました。

あるとき、宅配弁当業者からケアマネに連絡がありました。「この 2 日間、カラの弁当容器が一つしか出ていないんですよ。何かあったのかとちょっと心配で」と。

ケアマネジャーがご夫婦宅を訪ねたところ、妻がにこやかに出迎えてくれたそうです。「ご主人は？」とお聞きすると「ここ最近、主人は寝てばかりで、全然起きてこないよ」と。ケアマネジャーが寝室に入ったところ、夫はすでに亡くなっていて、死後硬直が始まっていたそうです。弁当を食べられる状況ではなくなってから、そのまま自然に亡くなってしまったようです。

そうした異変に、認知症の妻はまったく気づいていませんでした。そしてすぐにひとり息子に連絡をしましたが、息子は「そんな訳ないだろう。どういうことなんだ!？」と電話口で怒鳴ったそうです。

夫は、妻の認知症をすべてひとりで抱え込み、介護保険の世話にもならず、息子にも詳しい状況を伝えていませんでした。夫の死後、尊厳が辛うじて保たれる時期に発見できたのは、宅配弁当を利用していたことが幸いしたからです。

日常生活を送るなかで、何かしら異常があったときにどのように発見してもらい、どのようにその後の対応をしてくれる権限のある人に伝えてもらうか、このルートについてさまざまなリスクシナリオを想定しておくことは、決して無駄にはなりません。普段からしっかりと準備しておく必要があります。